

「知ることは力なり」

G5 (濱脇文子、角本静香、道上有沙、根立亜由美、岡田悠偉人、岡村弥奈、高森靖、竹内逸人、梅崎杏里紗、周桂珍、アドバイザー：村井洋)

「今、世界で。」

今、世界は多くの健康問題に直面している。国境を越えて、世界中で猛威を振るうであろう鳥インフルエンザ、先進国で深刻な過食に起因する生活習慣病、逆に食料不足から陥る発展途上国における乳幼児の低栄養、外貨取得のための化学肥料を大量に使った単一農業、そして地球温暖化などの環境破壊など、あげればきりが無い。国連やNGOなどの様々な機関が連携して、早急かつ全力に、その対策にあたっている。

しかし、ここで大きな問題に直面する。確かに、今回の数々の講義によって、世界レベルでの健康危機については理解できたものの、国際的な組織ではなく、いち個人として、一体私たちには何ができるのか。この健康危機が解決するためには、今私たち個人は何をしなくてはいけないのか。

端的に言えば、それは「世界の健康危機を知り、その世界の健康危機を身近なものとして捉える。」ことである。つまりは、世界の裏側にある、見えないものに想像力を働かせて、イメージする力である。食糧問題や女性問題、環境問題は先進国の日本には関係ないと考えがちであるが、日本も世界の中の国であり、その健康危機は決して他の国の問題ではない。逆に、日本こそが世界の健康危機の中核にいるといっても過言ではない。

今、このことを「知る」と必要なのだ。従って、今回は、自分の身近なものから、想像力によって、その裏に潜んでいる世界的な問題を抽出してみたい。身近にある小さなものから、世界における大きな国際問題や世界的な健康危機を考察してみたい。

「夢、笑顔」

世界や国際問題は、統計的なデータの中で語られ、無味乾燥になりがちである。児童買春や女性生殖器切除など、悲しみにあふれている世界。世界のたった16%の人が、世界中の82%の富を保持している格差の世界。こんなに暗い世界だからこそ、いま、世界中で「笑顔」を咲かせたい。自分たちは、少しでも多くの人が、自分の住んでいる地域で、笑顔で暮らせる、そんな世界に変えていきたい。それぞれの価値観をお互いに認め合いつつ、自分の環境の中で満足して暮らせる世界へ変えて行く。それが自分たちの夢である。

「身近なものの中に潜む健康危機」

WHOの健康の定義によると、健康は大きく、身体的、精神的、社会的健康の3つの側面から構成されていることがわかる。それぞれが関連して健康を作り上げているが、今回はそれぞれの側面で、身近なものから、世界の健康を考えてみたい。

「食」

まず、身体的な健康として、食をあげてみたい。食とは生きるために不可欠な要素であ

る。さらに健康を維持するためにはよりよい食生活を営まなければならない。ここで、日本において食べることは当たり前で、食べたいときに手を伸ばせば、すぐに食べられるという現状がある。果たして、この豊かさを健康維持のために活かしているだろうか。さらに、この恵みは自分たちの力だけで、成り立っているのだろうか。食べるものを選ぶほどにまで豊かであるのにも関わらず、日本にはカロリーの過剰摂取によるメタボリックシンドロームや偏った食事から引き起こされる糖尿病および高血圧がある。また逆に、細い＝美しいという概念が若い女性に定着し、過食症や拒食症などが深刻化している。

この背景には私たちが口にするコーヒーやチョコレートが主にアフリカなどの世界的にみて栄養不足にある地域で栽培されているという事実がある。つまり、こうした過食の日本を支えているのは栄養が足りていない地域の人々であるという矛盾に突き当たる。地球規模に視野を広げると栄養摂取の不均衡が生じており簡単には是正できない格差問題になっている。

こうした格差を解消することは容易ではない。だからこそ今すぐに、この豊かさは地球の裏側の人々によって支えられているという事実を知ることが必要である。

「健康危機とストレス」

次に精神的な側面である、ストレスをとりあげる。私たちの身近にあるストレスは、自分たちが思っている以上に案外深刻である。一見ストレスは先進国だけの問題のように感じるが、実は自然が多く、のどかだと思われている貧しい国にも共通して存在している。

先進国では、政治や国の問題などよりも恋愛、家族、仕事、経済といった比較的個人的な要因がストレスとなりうる強い傾向があり、一方で発展途上国では、反対に不安的な政治や国の状態が、個人のストレスに対して強い影響を与えている。

人が自然界、社会環境から受けて生きていることすべてがストレスになりえ、ストレスを完全に軽減するのは不可能だが、人との関係によって生じたり、人権を無視することによって起こったりするストレスについては軽減するように最大限努力していくことが不可欠である。

そのためには、人権を無視することによって起こるストレスを解決するための第一歩として、まず発展途上国のストレス状況を「知る」ということが大切であり、加えて、この世界的な健康危機について身近な友達に知らせることによって、その積み重ねにより徐々に社会全体に知らしめていくということが私たちにできることだと考える。

「リプロダクティブヘルス・ライツ」

最後に社会的な健康の具体例として、リプロダクティブヘルス・ライツを考えてみる。

リプロダクティブヘルス・ライツとは、ライフサイクルを通し、性と生殖の健康を権利としてとらえようという概念であり、妊娠・出産の調節はもとより、不妊、性感染症、HIV/エイズ、性暴力、売買春、女性特有の病気などが幅広く含まれる。

何故、今リプロダクティブヘルス・ライツが重要とみなされているのか。

その背景としては、FGMや強制売春など女性の権利を侵害していると思われる状況があ

り、まだ世界の女性たちのリプロダクティブヘルス・ライツが大切にされていないのである。これは日本と離れた遠い国の問題ではない。私たちの住む日本においても、これに類似する状況がある。

そのひとつの例として「中絶」というキーワードを挙げて考えてみる。何故ならば、中絶を選択するという事は、妊娠を望まなかったということである。望まない妊娠をしなければならぬということ、リプロダクティブヘルス・ライツの侵害であるからである。そもそも中絶は、母体へ精神的、肉体的に大きな負担をかけるものである。これはリプロダクティブヘルスの部分に大きく関わっていると考えられる。中絶の影響は、身体、精神に苦痛を与えるだけでなく、中絶後の母体の健康不良や不妊の原因にもなっている。

そして、先に述べた望まない妊娠が起こる原因には、避妊ができていないという状況が考えられる。避妊ができないという状況を引き起こしている背景において、その最も基本となるのは「男女の関係のあり方」である。現在の日本社会の男女関係において、「避妊したい」ということをパートナーの男性に言い出せない、言っても相手に受けいれてもらえない関係が存在しているのではないかと考える。これは、女性と男性が平等な立場にあり、お互いの意見が尊重されている関係であるとはいえないのではないのだろうか。これは、リプロダクティブライツが保障されていないといえるのではないだろうか。

これらの事に対して私たちが今出来ることは、ひとりひとりの人権を尊重して公平なパートナーシップをとっていくことの必要性を知る事だと考える。何かとても大きなことのように感じるかもしれないが、私たちの身近なところから変えていけるものである。しかし、これが最も基本的な部分であり、私たちの価値観を変える大きな第一歩となるのである。

「知ることの力」

これからの世界を築いていくのは、自分たち、若者の世代である。この世界をよりよい方向へ、そして笑顔あふれる世界へ変えていくためには、まず身近なところから世界の健康危機について、知ることが必要である。また、知ったからには、世界を変える勇気と覚悟が必要である。身近なところから、次世代の未来を、次世代の世界を築いていきたい。